

大久秀憲

Ohisa Hidenori
Romantic

ロマンティック



ロマンティック

Ohisa Hidenori
Romantic

大久秀憲

集英社

江苏工业学院图书馆
藏书章

ロマンティック

二〇〇一年一月一〇日 第一刷発行

著者 大久秀憲 おおくひさのり

発行者 谷山尚義

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇 千一〇一―八〇五〇

〇三―三三三〇―六一〇〇 (編集部)

三三三〇―六三九三 (販売部)

三三三〇―六〇八〇 (制作部)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社石毛製本所

©2001 Hidenori Ohisa. Printed in Japan

ISBN4-08-774504-X C0093

定価はカバーに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものに ついてはお取り替え出来ません。

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

本体 1300円

ロ
マ
ン
テ
ィ
ツ
ク

第二十四回 すばる文学賞受賞
『すばる』二〇〇〇年一月号掲載

なんでもこう書いてある。

「一九八四年のシーズンはある記録とともに閉じられた。その年、僕の最後のシーズン、チームはすべての対外試合において一勝もあげられなかったのである。」

あのベアーズも勝ったというのに。しかしあれは、弱かったものが最後の最後に勝つといったありきたりな物語の誘惑には負けてしまっているのだ。僕たちの全敗は、そんな物語への疑いの表明であった。と、今ここで当時のキャプテンは空前の初勝利を報告できるので、あの夏の河川敷の少年たちには聞こえない。彼らはやはり一度も勝てなかっただけだ。

いや勝たなかったのだ。全敗は全勝同様に勝ち負けの意味を消失させる。そのとき河川敷は、始原かつ究極の完璧な場所となっていた。そこは野球の究極の始原である少年野球が実践されることで、すでにそうであった。完璧さが二重となった瞬間の発光が、

あのシーズンを眩くする。それは今もなお、けして残像ではなく」

書き終えたときには思わず、決まった、とつぶやいたかもしれないが、あらためて読むと迷わず赤鉛筆で添削したくなる。

郷里の少年野球チームの結成二十周年記念につくられた小冊子に僕が書いたものだった。なるべく四百字以内におさめるようにいわれていたのでそのことばかりに気がいつて、分かるような分からないような文章になっている。変に飾ったところがあるのは当時読んでいた本の影響だろう。覚えていないけれど、推測するに、詩人の書いたものではないかと思う。

原稿料として図書券を二枚もらった。野球に因んで正岡子規の随筆と句集を岩波文庫で買った。

要は一度も勝てなかったキャプテンの弁明なのだが、強いのに勝てなかったというのならまだしも、弁明も通らないぐらいやはりあのチームは弱かった。

試合前、先ずキャプテン同士が先攻後攻を決めるジャンケンをする。これが僕はやらと強かった。いつも勝っていた。そして試合に負けていた。それが県内のわりと大きな規模の大会の予選に出たとき、はじめてジャンケンに負けた。これは試合に勝てる、とチーム一同意気込んだのだが、今でも覚えている、センターの二連続走者一掃タイム

リートンネルによって惨敗した。愕然とした。ほとんど感動したといってもよかった。ジャンケンに勝とうが負けようが、野球は負けることになっているのだと僕はそのとき観念した。これはひとつの野球観であって、けしてジャンケン観ではない。

ジャンケンに勝ったのはなにもかんがえずに無心で臨んだからだった。ということは、野球に負けたのは、なにかをかんがえていたからだ。かんがえる野球なんてプロでもなかなかできるものではない。それを田舎の少年たちが毎試合実践していたのだ。かんがえる野球は、かんがえるほど、ジャンケンみたいな無心の野球にどうかすると足元をすくわれる隙ができる。僕たちはいつもその隙を突かれていたわけだが、先取点は取るが後半先発が四球で崩れて味方エラーで自滅するという負けパターンは揺るぎなく、その点ではまったく隙はなかった。

書いたきり忘れていた文章を読み返し、そうして昔を思うことになったのは、一本の電話のせいだった。

「そっちは雨？」僕がいった。

「雑音が混じってるんだろう」といってから、電話口を離れた気配があり、「降ってるやだな。梅雨が終わったと思ったら」

窓の外は月夜だった。東京でも前日まで長い雨が降っていた。

電話はチームの現監督からで、北村といった。

北村とは東京の大学で二年間クラスがいっしょだった。向こうは東京の出で、大学へは付属の高校から上がってきた。これからも苦労知らずでいかせていただきます、とクラスの顔合わせの飲み会でいったとおり、就職活動はせずに難なく教員免許を取った。しかしそれから採用されるまでが難しいので、苦労を知りたくない北村は、教師を両親に持つ僕に頼ってきたが、頼られてもどうにもならない。無理、とその場で宣告すると角が立つのでいちおう当たってはみたという事実を残すために父親にはなしてみると、案外偉い立場にいるらしく、採用試験である程度の成績をあげればすくい上げてやれないこともないという。困ったことになった。北村の役に立てるのはいいけれど、教師は地方公務員だから、父が勤めている宮城県内でしか融通はきかない。都会っ子がそれでは悲しいだろう。そのうえ新人はたいがい辺鄙な土地の学校にやられる。小学校に地下鉄千代田線を通っていた子がそれでは辛いだろう。

だから止したほうがいい。そう忠告しても、二十四の瞳みたいでおもしろいじゃないかと受け流す。『二十四の瞳』は大石先生の生徒がのちに戦争に取られたりしておもしろいというより悲惨だったではないか、とたしなめたが、そんなたしなめ方があるものではない。

都会の学校はもう見捨てるしかないと北村はいった。それには地方の学校を出た僕はなにもいえず、北村は宮城にいった。三年が経った。

宮城に来た、というべきなかどうか、宮城に生まれ育ち、高校を卒業してからはずっと東京にいる僕はいつもいい方に迷う。夏になれば帰郷して夏が終われば帰京する習いだった。どちらが本拠地なのか分からない。帰郷も帰京も音が同じだから余計ややこしい。ホームがアウェイでアウェイがホームで、僕はいつも遠征先に帰還しているという具合だった。

帰郷の日を僕が北村に報せることはあっても向こうからきいてくるのはめずらしい。わけをたずねると、また電話口を離れた気配がして、それから、

「夏休みのあいだ、監督代わってもらえないかな」とこたえが返ってきた。
じつに分かりやすい。ただ事情が分からない。

「うん、夏ちょっと僕だめなんだよ」

それではなにも分からないと同じだったが、事情があるらしいのは分かった。

「合宿もあるし、たのしいよ」

「よろしいです。やりましょう」

じゃあ夏に、と最後にそういって、電話は切れた。

あつてなく夏の予定が決まったが、前々からの予定に追われる日々を過ごす身としてはあつけないのがおもしろい。北村もそこを見越してきたのだろう。僕は即答だったが向こうはどれほどかの時間をかけてかんがえた結果僕に電話してきたはずで、その時間は長くともみじかくとも、なんだか重いように思われた。

北村は僕が通った小学校で教えていた。なにもわざわざ僕の小学校に飛ばされなくてもよさそうなものだが、北村の立場でいうと、なにも僕がそこを卒業していなくてもよさそうなものだ、となって、差し引いて残るものはない。

小学生の頃を思い出してみると、教室には、あとになって自分に思い出されるとは知らない僕がいる。そこになんともいえない味わいがあるのだが、そこへ北村が赴任したとなると混乱が起きて、どうかすると記憶のなかの教壇に北村が立っていたりする。さらには僕が教壇の北村の視線を借りて少年の僕のすがたを捉えたりする。

自転車で河川敷まで坂はみつつ、下りて上って下りる。木々の覆いかぶさる道を、自転車にしてはゆっくりと走り抜け、坂道の埃の匂いに包まれ、わずかに汗が匂った気もして、わざと道の砂利の深い方へ漕ぎすすんだりして、いつしか水の匂いのなかにいる。緑の稲を一面に映す、田圃の水の匂いだ。土手へのぼると川の水の匂いに変わる。海が近く、潮の匂いもまじっている。葦あしや薄すすきの茂みを背にして広がる河川敷を土手の上から

眺めれば、金属バットの打撃音より澄んで、少年たちの声が高くのぼっている。彼らはまだ僕に気づいてはいない。

記憶のなかで河川敷をさぐる視線も、監督として現在の河川敷を見渡す北村の視線とどこかさなっているのだろう。

どちらからともなく受話器が上げられて、

「まだ眠っていないようだね」

「でももう眠るよ」

「同じ夢を見そうだなあ」

じゃあ夏に、とどちらかが最後にそういった。

河川敷の少年たちはまだ僕には気づかない。夏草や、ところきて、ベースボールの人遠し、とまあこうできあがる。僕がチームにいたのは十四年も前のことだった。近くても遠い。

*

溜池、という地名がうつくしかった。

鳴瀬、もなかなかだと思った。

溜池はサントリーホールのあるので知られているが、鳴瀬町は僕の生まれた土地で、誰も知らない。宮城県桃生郡鳴瀬町とくわしくいっても分からないものは分からない。東京から仙台まで新幹線で二時間、それから在来線で一時間、ところが、帰省の予定を書き込んだ手帳のあいだに、演奏会の切符が挟んであった。

それで溜池へ出かけた。ほんとうなら東京よりは快適な東北にいるはずだったのに、蒸し暑い夜の地下道をホール目指して歩いていた。

七月八月は在京のオーケストラは定期演奏会を休むので、僕のホール通いも休みになった。しかしホールが空いたところへは特別公演が入る。切符を買ったのは半年前で、あやうく忘れるところだった。

よくも楽団員はわざわざ海外から忘れずにホールに集まってきたものだ。五年も先までスケジュールが決まっているような環境ですべての予定を覚えてはいられないはずだが、彼らにしてみればその五年のあいだは死なずにいられるという思い込みがどこかにあって、思い込みを実現させるためにはただひとつの予定も忘れるわけにはいかないのかもしれない。

指揮者は瘦せていた。白髪だった。舞台袖から指揮台にたどりつくまで時間がかかっ

た。

指揮者には長生きが多くて、八十過ぎまで生きたのはヨッフム、チェリビダツケ、マタチツチ、ストコフスキー、トスカニーニ、クレンペラー、ワルター、シオルテイ、ベームなど、ざっと調べただけでもこれだけ出てくる。ヴァント、ムーシン、ザンデルリンク、ジュリーニ、フルネ、朝比奈先生といった現役勢もどこまでいくか分からない。あの指揮者も、あと五年、あと五年、そうやって生きてきたのだろう。それだから、これからも五年ずつ、同じように生きていける。歳を取れば取るほど死から遠ざかっていくかのようだ。

プログラムのメインはブルックナーの交響曲だった。相変わらず長くて退屈だった。僕は舞台が明るくなって楽団員が引き上げてまだ拍手を止めなかった。

ブルックナーはたしかに退屈だ。弦が微弱に音を細かく刻み、聴く側がじれったくなってもまだまだ音は弱く、あきらめかけたところでいきなり大音量の主題が導かれる。当夜の曲も懲りずにそうしてはじまった。決まり切ったその開始のかたちは、ブルックナー開始、と音楽の分野では呼ばれていた。同じひとつの交響曲を繰り返し作曲しつづけた、との批判もある。

ブルックナーが死んだのは一八九六年、七十二歳だった。モツァルトやシューベルト

など、音楽家には天折のイメージがあり、それを除けてみても、時代をかんがえれば長命といっている。

彼は教会に住み込んでいた。そこで毎日オルガンを弾いていた。その長い生涯、たったひとつの曲を繰り返し書きつづけた。つくづく退屈だったろうと思う。場所が教会だから、退屈とはいいいにくい雰囲気のかな、だまって耐えつづけた。強い信仰があったから耐えられたのではなかった。耐えること、それが信仰のしるしだったのだと思う。

龍甲色に明るいステージを、髪から肩ぐちへぼんやりと照明の反射光を受けて、いつも黒の上下を着て赤い椅子に沈みこんで見つめている僕はというと、退屈をしのぐことばかりをかんがえがちで、こうして演奏会に通いつめるようになったのも、その一環だった。

それがブルックナーを聴くようになってからかんがえが変わって、退屈はしのいではないのだと思うようになった。ブルックナーがおもしろくなりだしたのはそれからだった。

退屈の極みに自分を陥れたとき、自分は自分と向き合うのだろう。それは試練に思われる。かんがえただけで嫌になるが一度でもブルックナーをおもしろいと思ったからにはいまさらチャイコフスキーには戻れない。

退屈だからおもしろくないというわけではないのですよ、とブルックナーはしつこく丁寧な僕を励ます。演奏されたのは第四番、そのタイトルが僕をさらに励ます。

『ロマンティック』

彼の交響曲のうち、タイトルがついているのはそれ一曲きりだった。

ロマンティックな試練。どういうことか分からないけれど、僕の気を惹く。

あるエピソードがプログラムの作曲家紹介の欄に読めた。ブルックナーはある女性と婚約を交わした。ブルックナー七十歳、相手はまだ十代。

やるじゃないかアントン君、と僕はファーストネームで呼びかけたくなった。オルガンを弾くだけの毎日だからといって、おもしろくないというわけではない。

終演後、ホールを出ると、四方のビルから白い光が投げかけられて、自分の行く先に自分の影が黒く長くかぶっていた。雨が降ったのらしい、地面がきらきら光っていた。あんなところに月が出ている。あたりに昼のうちの熱っぽい匂いがまだ残っていた。

地下道は天井から水漏れがしていた。溜池、という名がうつくしい。いや鳴瀬だっとなかなかのものだ。

翌朝、帰省の支度をしながら、わけもわからずに少年野球に巻き込まれるみたいに思っていたが、そもそものきっかけは冊子に書いた自分の文章だった。

原稿用紙一枚ほどの文章がこの夏の遠いブルックナー開始になっていたというわけだった。

いったい、はじまったのかはじまっていないのか、音が弱くて分からない。しかしとうにはじまってはいたのだ。

*

そして、とうに夏ははじまっていて、僕は郷里の駅に降り立った。ちいさなロータリーに黒い四輪駆動車が一台停まっているのが見えた。夏に黒は暑い、と屋根のないプラットフォームの照り返しのきつさにいらついていた僕に、なんの関係もないのに当たり散らされたのだが、関係はあったので、乗っていたのは古くからの知り合いだった。窓辺、という男だった。ちいさな町なので帰って来ると知り合いばかりだ。迎えに来てくれたのだという。大変ありがたかったが、家までの道が違っている。車は河川敷に向かっていた。

窓辺とは少年野球チームでいっしょだった。ついだが幼稚園から高校までもいっしょだった。セカンドの僕とショートの間は守備に対して共通の理念を持っていた。捕